

# 第1章 小都市の概要

## 1. 自然環境

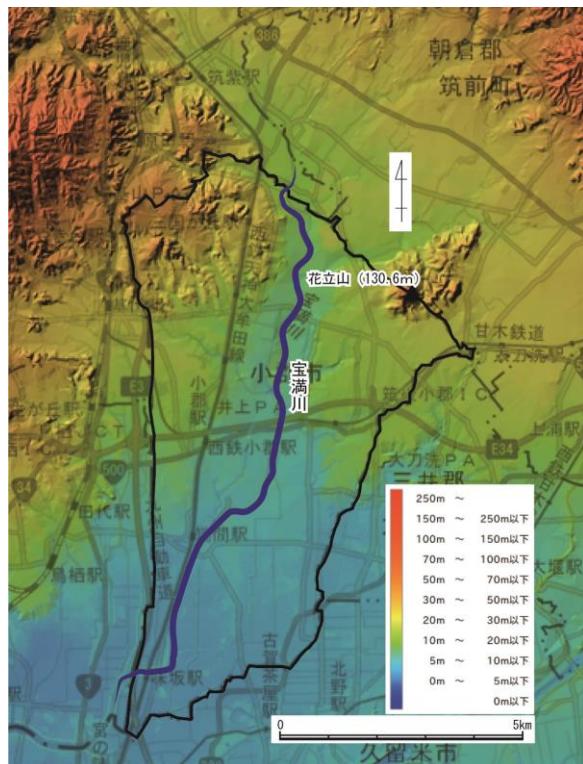
### [位置・地形・地質]

小都市は福岡県の中西部、北緯 33 度 24 分、東經 130 度 33 分に位置し、北は筑紫野市、東は朝倉郡筑前町・三井郡大刀洗町、南は久留米市、西は佐賀県鳥栖市・三養基郡基山村と接しています。市域は東西 6 km、南北 12 km に広がり、総面積は 45.51 km<sup>2</sup>です。30 km 圏内に県庁所在地である福岡市と佐賀市があり、玄界灘と有明海も同じくらいの距離です。

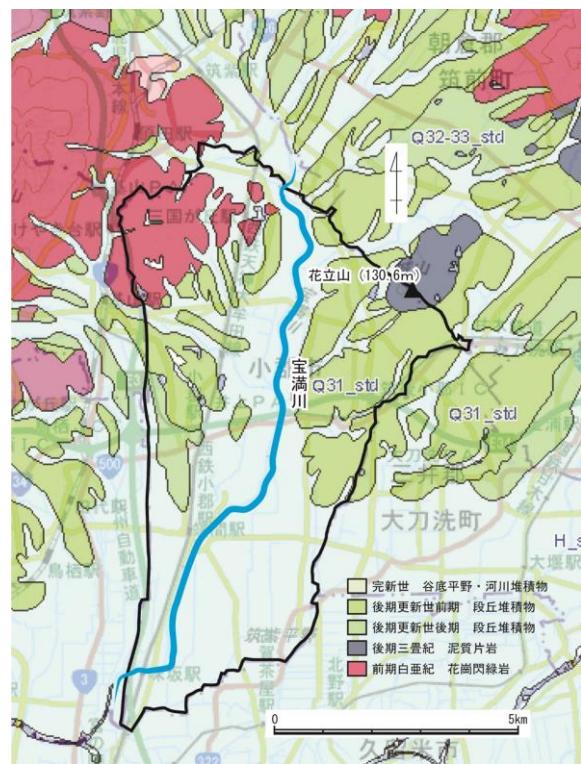
市域の中央を三郡山（筑紫野市・嘉麻市・糟屋郡宇美町、標高 936.3m）を水源とする宝満川が南流し、久留米市内で筑後川と合流して有明海へ注ぎます。西岸に脊振山地から派生した丘陵地があり、旧国のかくご（小都市）・かくぜん（筑紫野市）・ひぜん（基山村）の国境にあたることから三國丘陵と通称されています。ここから南へ向かって、幾筋も谷が入り組んだ台地が延びています。東岸に独立丘陵の花立山（標高 130.6m）があり、ここから南へ向かって緩やかに傾斜します。南部は河川が運んだ土砂による低地が形成されており、これがさらに南の筑後平野へ連なります。また



小都市の位置



小都市の地形  
(国土地理院 (電子国土 Web)  
色別標高図、陰影起伏図、標準地図 一部加筆  
\*市境は国土地理院地図に拠る)



小都市の地質  
(産業技術総合研究所地質調査総合センター  
「20万分の1日本シームレス地図」一部加筆  
\*市境は国土地理院地図に拠る)

北側は、東の三郡山地と西の脊振山地から丘陵がせり出した地峡帶で、福岡平野と筑紫平野のひとやものの往来はここに集約されます。

北西部の丘陵地は花崗閃綠岩からなり、これが開析されてできた段丘堆積物が東と南に分布しています。花立山は泥質片岩からなり、その南に氷河期の段丘堆積物と開析が進んだ浸食谷が見られます。宝満川の沿岸や南部は、三郡山地と脊振山地から流出した河川堆積物が広がり、肥沃な沖積地を生み出しています。

## [水系]

主な川は市域を南北に貫流する宝満川です。これに宝満山を水源とする草場川・鎗巻川、脊振山地を水源とする宝珠川・高原川など、東西から多くの支流が流れ込み、南下して筑後川へ合流します。

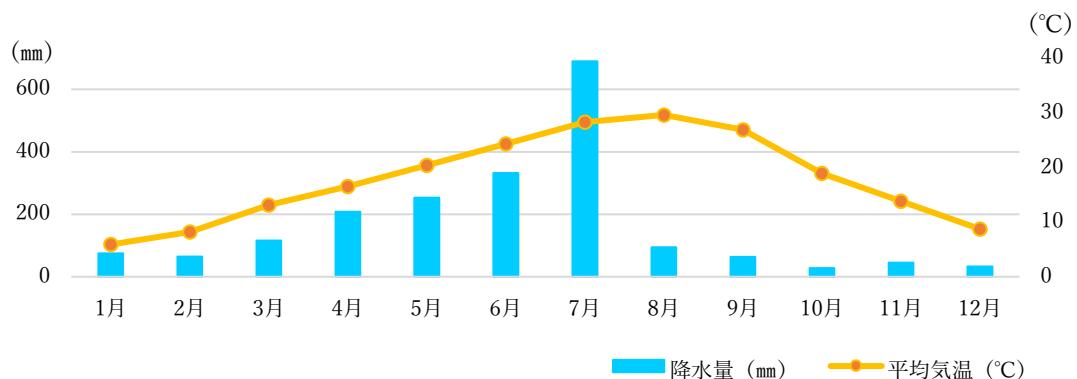
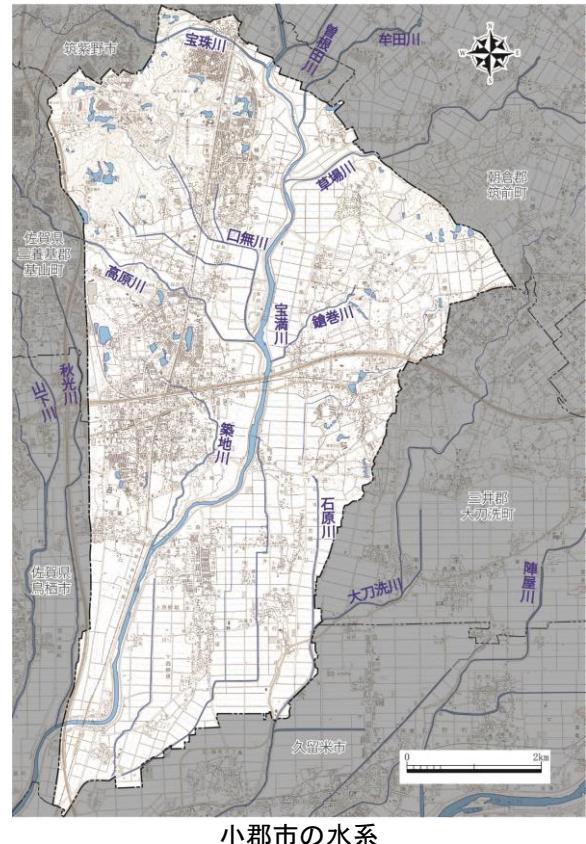
宝満川やその支流の各所に井堰が設けられ、農業用水として利用されています。また河川の水を利用して北西部の丘陵地や台地では、溜池が造られています。

## [気候]

気候は内陸型気候区に分類されており、有明海に面した筑後平野は全てこの気候区です。

年間平均気温は 17.5°C (平成 29 (2017) 年～令和 5 (2023) 年の平均) で、夏は猛暑で冬は寒さが厳しい地域です。また、日中の気候変化が激しいことも特徴です。観測史上最高気温は平成 30 (2018) 年 8 月の 39.5°C、最低気温は平成 28 (2016) 年 1 月の -6.5°C です。

年間降雨量の平均は 2,075.5 mm (平成 29 年～令和 5 年の平均) と比較的多雨です。降水量は梅雨時期の 6 月から台風シーズンの 9 月に多い傾向ですが、年により変動します。また近年は、集中豪雨による家屋や道路の浸水被害が増えています。



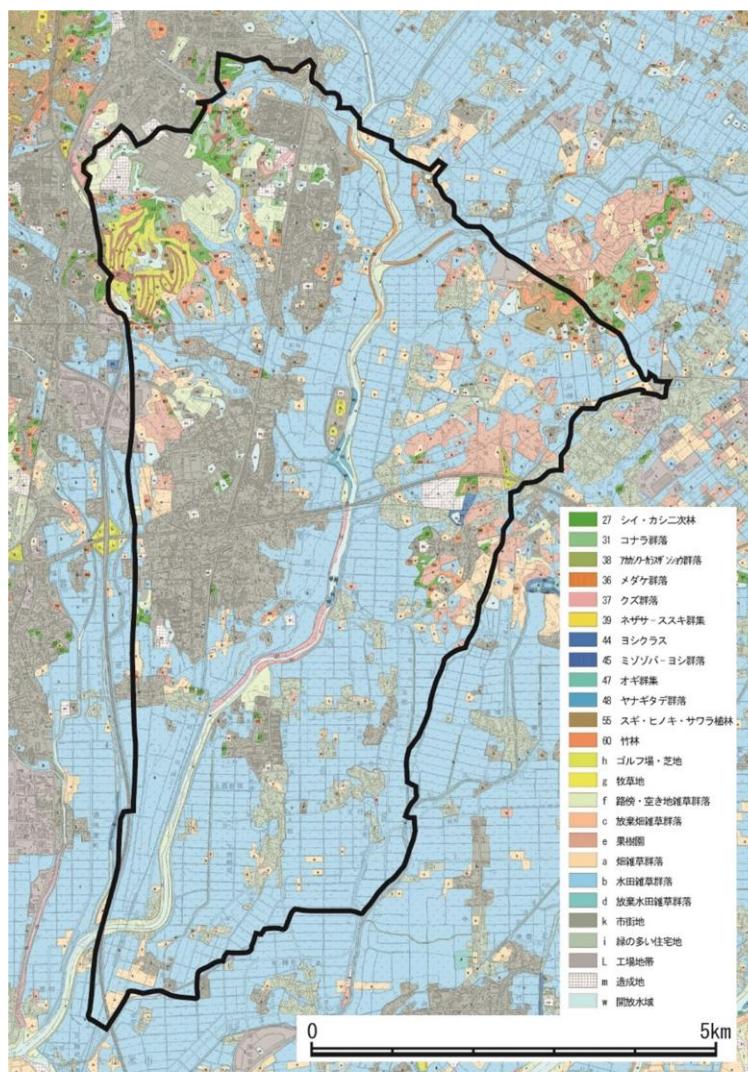
令和 5 年の気候データ（気象庁久留米観測地点）

## [動物・植物]

当市は、宝満川や花立山など水と緑に恵まれた環境にあり、さまざまな動物・植物を目にすることができました。しかし、昭和後半から急速に市街化が進み、近年は自然環境や景観の保全が課題となっています。

三国丘陵は大規模な宅地造成によって環境が激変し、現在はごく一部に自然林が残されるのみです。その一方で、社寺の境内や旧宿場町の周辺、河川敷や田畠、農業用溜池などでは、さまざまな植物が生育しています。神社には、天忍穗耳神社の大クスをはじめ、クスノキの巨木が御神木として祀られています。横隈・松崎の旧宿場町には、町の防御と防風の役目を担った竹林があります。溜池やそれに隣接する湿地には、国(環境省レッドリスト 2025)や県(福岡県レッドデータブック 2024)に絶滅危惧種と掲載されているオニバスやツクシオオガヤツリが見られます。

三国丘陵や花立山周辺には、モグラ・ウサギ・イノシシ・タヌキなどの野生動物が生息しています。また江戸時代から鴨猟がさかんで、久留米藩の猟場となっていました。現在でも秋になると、溜池や湿田で多くの種類のカモが見られます。また令和元(2019)年以降はコウノトリの飛来も確認されています。



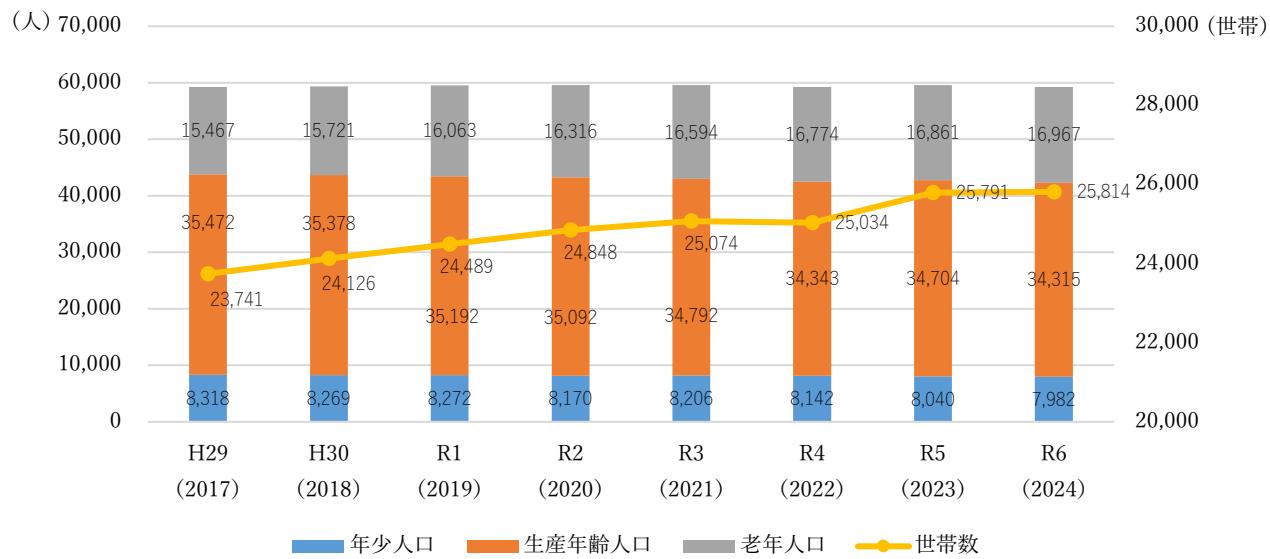
小都市の植生  
(出展：環境省自然環境局生物多様性センター  
第6・7回自然環境保全基礎調査  
植生調査  
1/25,000 植生図「二日市」「鳥栖」  
GIS データを使用して小都市が作成・加工  
\*市境は国土地理院地図に拠る)

## 2. 社会環境

### [人口]

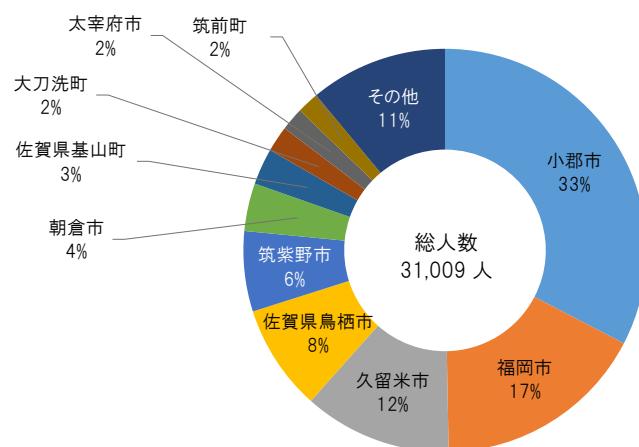
令和7（2025）年8月1日現在の人口は59,503人で、令和2（2020）年からの5年間で75人減少しました。0～14歳の年少人口と15～64歳の生産年齢人口は減少、65歳以上の老人人口は増加しており、令和3（2021）年4月時点の高齢化率は27.8%まで上昇しています。

国立社会保障・人口問題研究所の推計では、今後も人口はゆるやかに減少し、令和22（2040）年には55,569人になるとしています。また、老人人口がさらに増加、年少人口と生産年齢人口は引き続き減少するとしています。



小都市の人口推移（住民基本台帳のデータを基に作成）

また、令和2（2020）年の<sup>ちゅうかん</sup>人口は49,493人で、<sup>ちゅうやかん</sup>人口比率は83.4%です。通勤・通学のため市外で日中の大半を過ごし、市内で活動する時間は少ない傾向が見て取れます。なお市の統計によると、この比率は年々上昇傾向にあります。市外の通勤・通学先は、福岡市と久留米市の割合が高く、佐賀県鳥栖市がこれに続きます。



令和2年度の小都市民（15歳以上）の通勤・通学先（小都市公式ホームページのデータを基に作成）

## [土地利用]

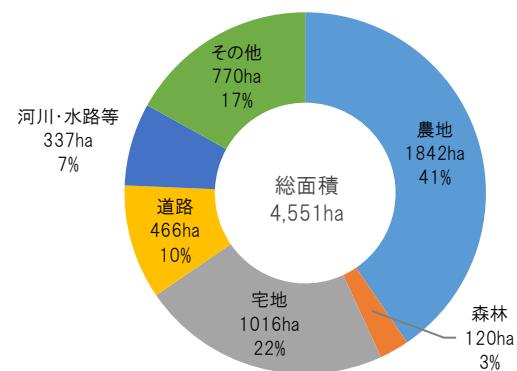
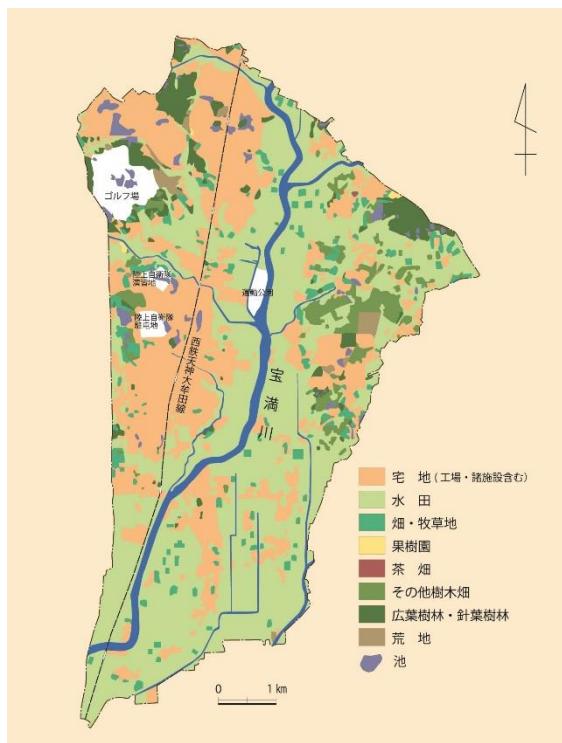
市域は全てが都市計画区域としています。昭和 46(1971) 年に市街化区域と市街化調整区域の区分が定められ、宝満川の東岸や西岸南部には田園地帯が、西岸の北部から中央部にかけては住宅地が広がっています。

当市は福岡市と久留米市の中間に位置し、公共交通機関の接続が良いという利点があります。そのため昭和 40 年代以降、市の北西部にある丘陵地で大規模な宅地開発が進められました。

## [産業別人口]

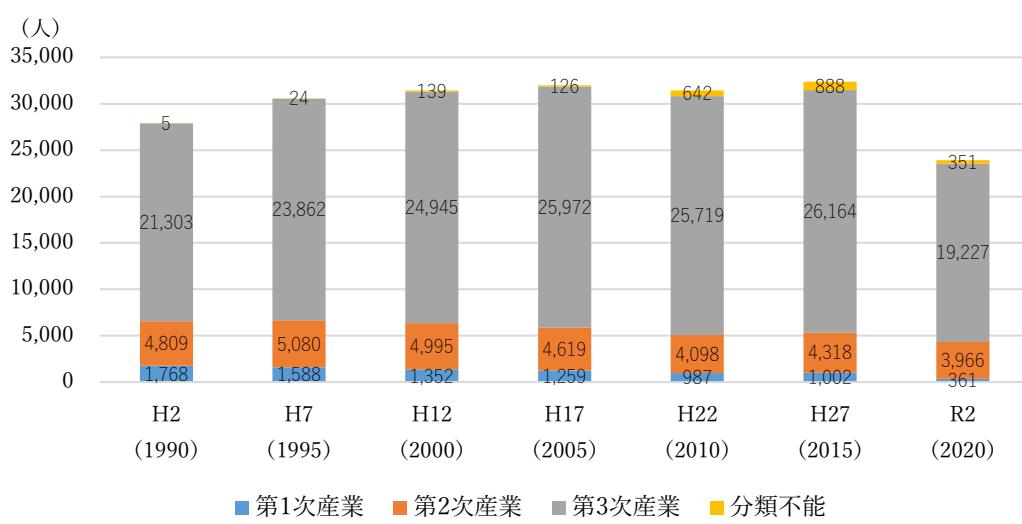
令和 2 (2020) 年の就業者人口は 23,904 人で、そのうち第 3 次産業の従事者が 81.6% を占めています。市域の 4 割以上が農地として利用されていますが、第 1 次産業の就業率はわずか 1.5% です。第 2 次産業の就業率も 16.8% で、いずれも年々減少しています。

第 2 次産業の就業者のうち、7 割以上が製造業に従事しています。また、第 3 次産業で多いのは卸売業・小売業です。当市には、大分自動車道の筑後小郡インターチェンジと九州自動車道の小郡鳥栖南スマートインターチェンジがあり、九州の東西南北の高



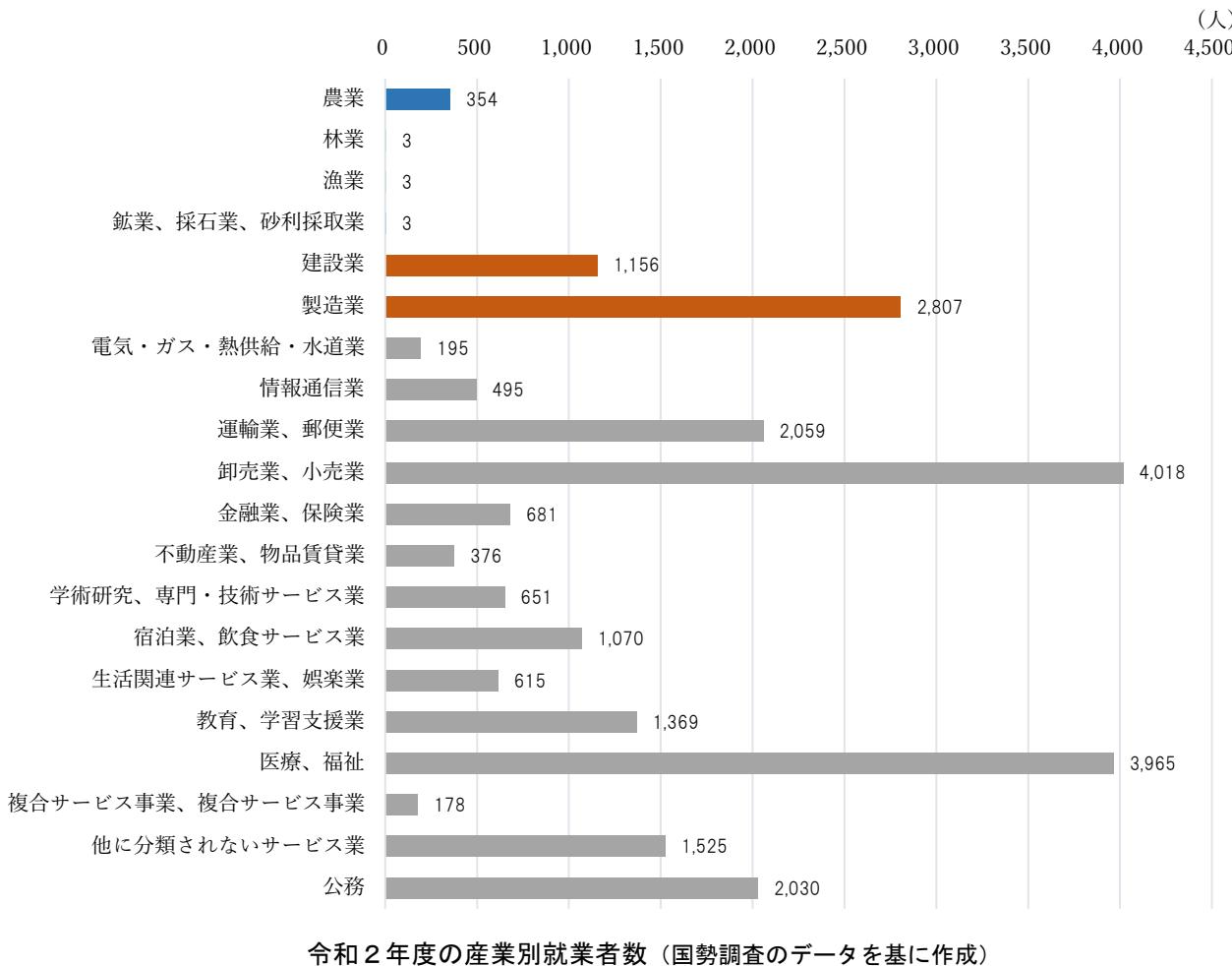
小都市の土地利用

(グラフは 福岡県「令和 5 年度土地利用動向調査」を基に作成)



小都市の産業別人口推移（国勢調査のデータを基に作成）

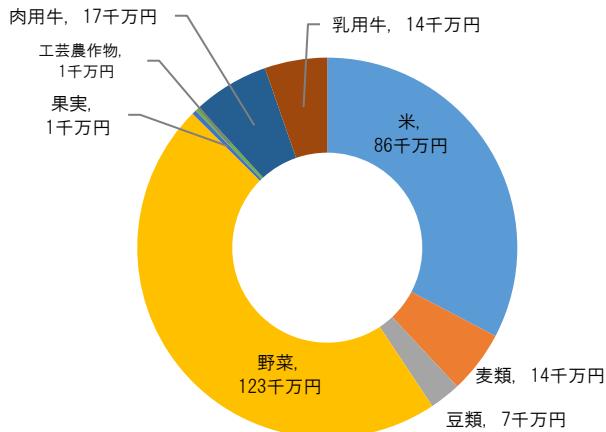
速道路を結ぶ鳥栖ジャンクションも近接しています。そのため、干潟や上岩田、小郡、さらに隣接する鳥栖市に大規模な工業団地や流通倉庫が所在しています。そのほかに特徴的なのは、医療・福祉と公務の就業者が多い点です。



### 〔農業産出額〕

当市は弥生時代から水稻栽培がはじまり、江戸時代は久留米藩の穀倉地帯でした。現在でも農地の大半は水田です。しかし、令和4（2022）年の農業産出額を見ると、米の産出額は全体の3割程度にとどまっています。

最も多いのは野菜で、産出額の5割を占めています。近年は、宝満川の周辺で、麦類・豆類の二毛作栽培から野菜の栽培へ転換する畑が増えています。



令和4年の農業区分別産出額  
(農林水産省「市町村別農業産出額（推計）」を基に作成)

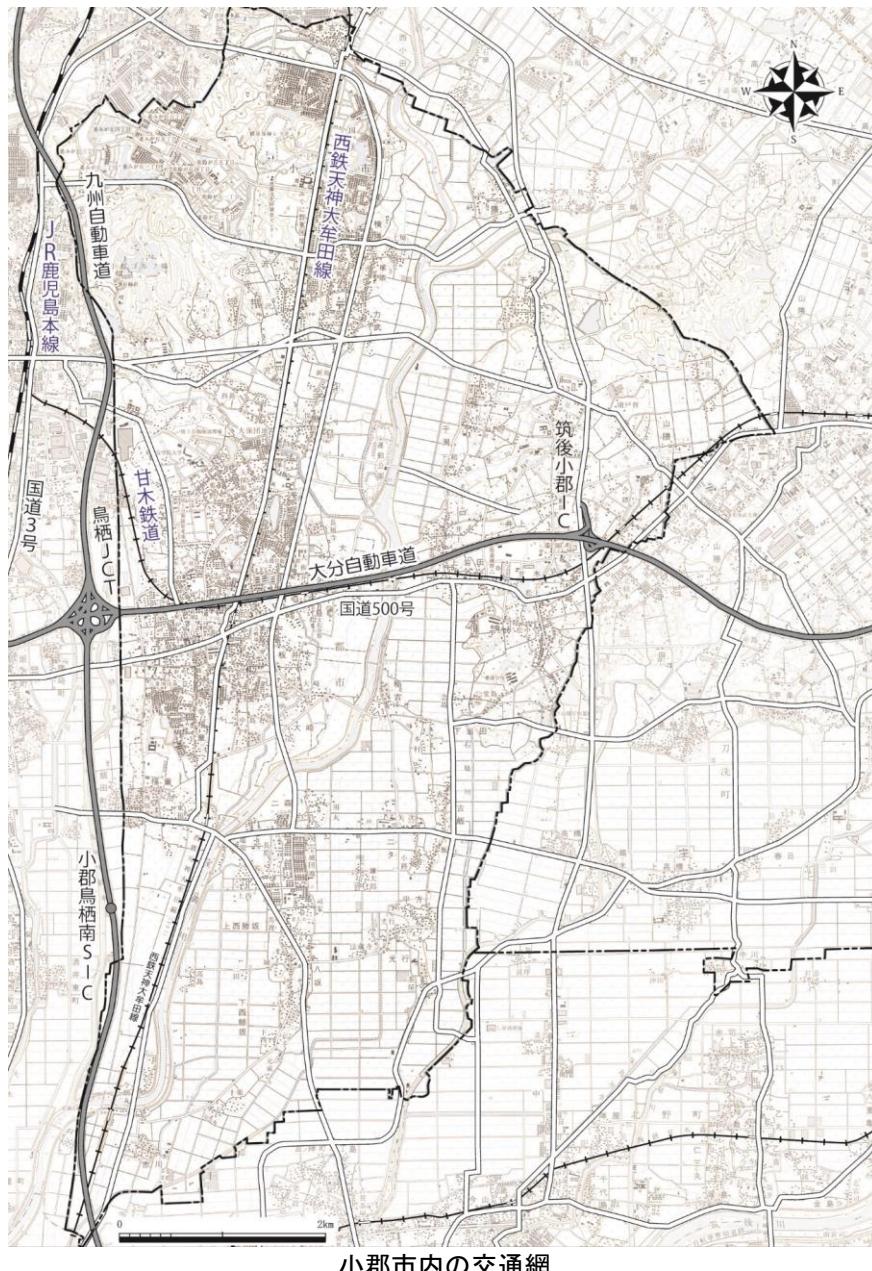
## [交通]

古来交通の要衝であった当市には、現在も交通網がはりめぐらされています。

一般道は国道3号から分岐した国道500号があり、県の中部を東西につなぐ重要な幹線道路となっています。高速道路は、佐賀県との県境から西へ500mの位置に九州の東西と南北に結ぶ鳥栖ジャンクションがあり、ここから東へ延びる大分自動車道が国道500号と並走しています。

鉄道は、福岡市と大牟田市を結ぶ西鉄天神大牟田線が市域を縦断し、市内に津古・三国が丘・三沢・大保・小郡・端間・味坂の7駅があります。またJR基山駅と朝倉市甘木を結ぶ甘木鉄道が横断し、小郡・大板井・松崎・今隈の4駅があります。この2路線は小郡駅で接続しており、通勤通学の要となっています。

市内を巡回する路線バスやコミュニティバスの運行はありませんが、宝満川の西岸はAIオンデマ



ンドタクシー「のるーと小郡」を、東岸は「おごおり相乗りタクシー」を、それぞれ市が運行しており、公共交通として利用されています。

### [文化施設]

文化施設は、三沢の埋蔵文化財調査センターと大板井の市民ふれあい広場があります。埋蔵文化財調査センターは昭和 60 (1985) 年に開館し、平成 17 (2005) 年に増築を行いました。文化財の調査と保存・活用を行う、文化財行政の拠点です。

ふれあい広場は、昭和 62 (1987) 年に市制 15 周年記念事業として設置しました。文化会館・図書館・野田宇太郎文学資料館・文学散歩公園の 4 つからなります。また平成 5 (1993) 年、市制 20 周年を記念して隣接地に七夕会館（現・生涯学習センター）を建設しました。

また平成 22 (2010) 年に県立の歴史系博物館である九州歴史資料館が太宰府市から移転・開館し、調査・研究や情報発信を行っています。

### [公民館とコミュニティセンター]

公民館は、戦後に地域活動や集会の拠点として設置された分館施設（現在の自治公民館）からスタートしています。昭和 45 (1970) 年に中央公民館を建設し、講座やサークル活動、文化祭などの活動が活発に行われました。その後、人口の増加や社会教育活動の進展を受けて、平成 3 (1991) 年の味坂校区公民館建設を皮切りに、各小学校区に校区公民館を設置しました。

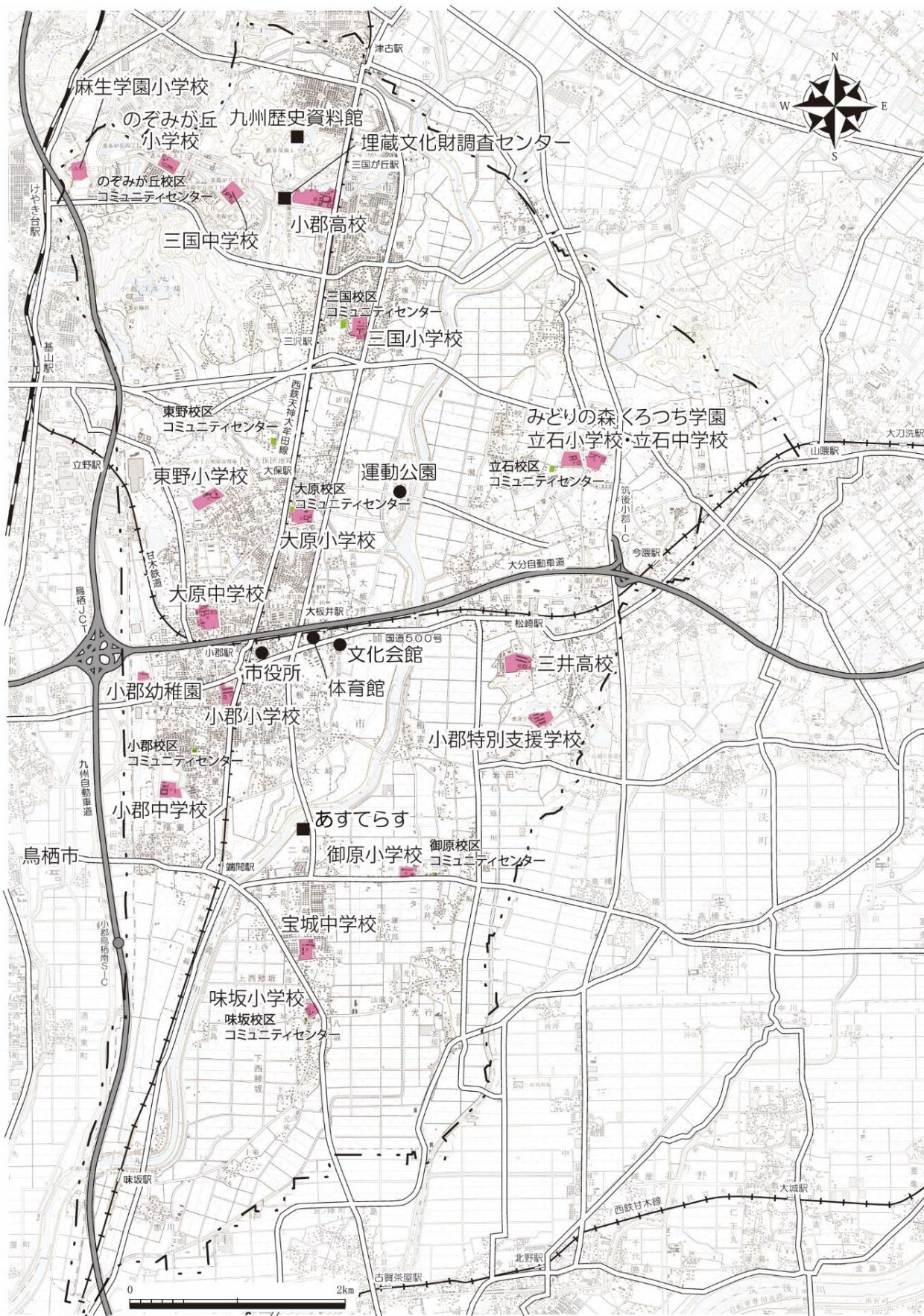
平成 30 (2018) 年 7 月に、生涯学習活動だけでなく、地域コミュニティ活動の拠点として位置付け、コミュニティセンターと名称を変更して現在に至ります。

### [学校]

当市の近代教育は、学制が出された明治 5 (1872) 年に小郡小学校が開設されたことに始まり、明治 11 (1878) 年までに横隈小学校（現・三国小学校）、松崎小学校（現・立石小学校）、古飯小学校（現・御原小学校）、八坂小学校（現・味坂小学校）が開校しました。

昭和 22 (1947) 年の教育基本法及び学校教育法の公布後、小学校 5 校、中学校 3 校（開校時は小郡のちに大原へ改称・立石・宝城）で新たな教育制度がスタートしました。その後、宅地開発に伴う人口増を受けて、小学校の分離や公立幼稚園、中学校の新設が進みました。昭和 47 (1972) 年に小郡幼稚園と大原小学校、昭和 50 (1975) 年に三国幼稚園と宝城幼稚園、昭和 55 (1980) 年に小郡中学校、平成 3 (1991) 年に東野小学校、平成 6 (1994) 年に三国中学校、平成 11 (1999) 年にのぞみが丘小学校が開園・開校しました。令和 6 (2024) 年 4 月からは、地域の良さや特色を生かした教育を行うため、立石小学校・立石中学校で小中一貫教育がスタートしました。

現在は少子化などの影響を受けて減少し、幼稚園 1 園、小学校 8 校、中学校 5 校（うち小中一貫教育校 1 校）となっています。



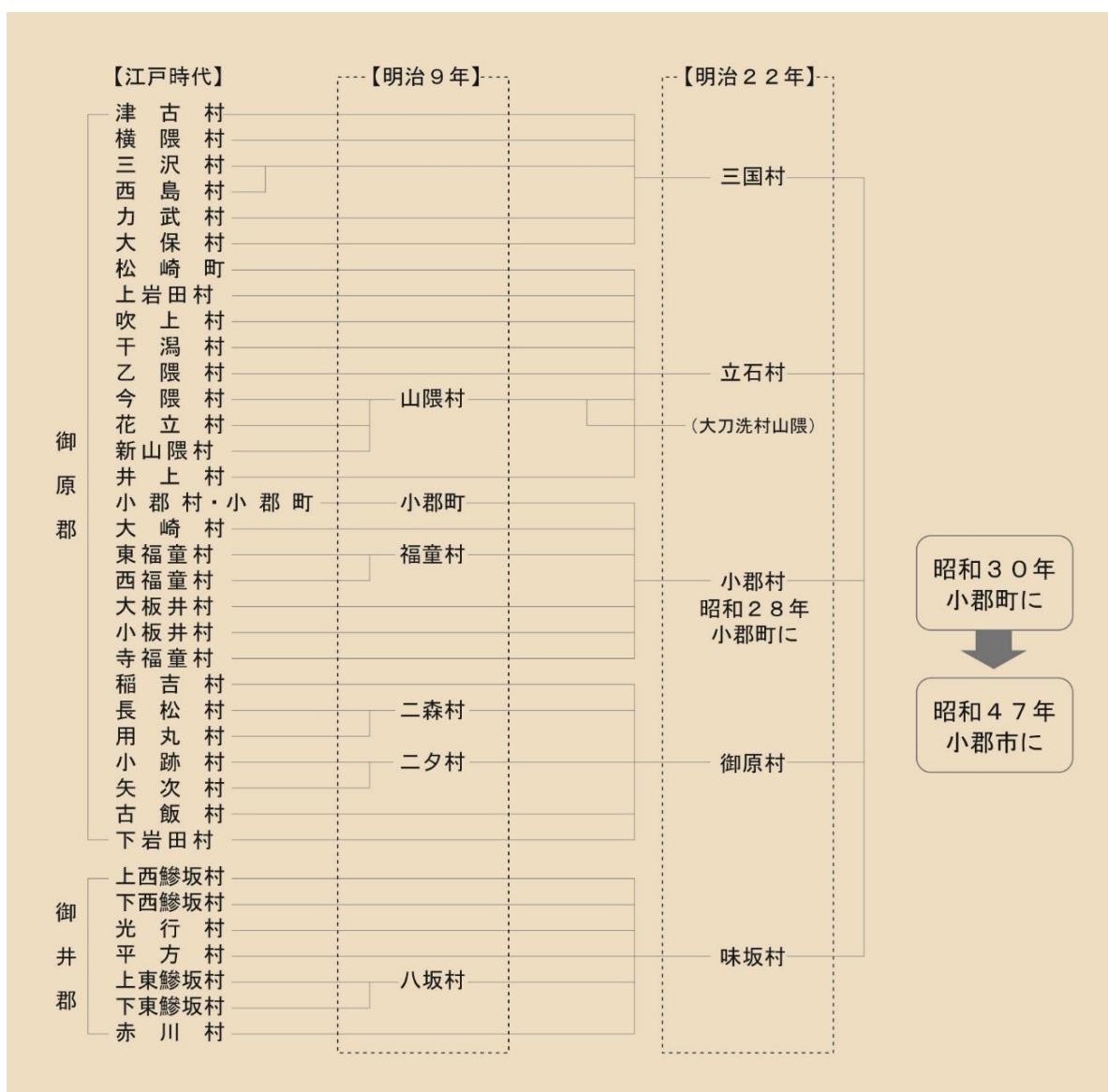
小都市内の公共施設

## [行政区画としての小郡市に至る沿革]

行政区分の歴史は、平安時代に記された『和名類聚抄』にさかのぼります。現在の当市の大部分は、筑後国御原郡、南部の一部が御井郡でした。江戸時代は全域が久留米藩領で、御原郡 28 町村と御井郡 7 村が置かれました。

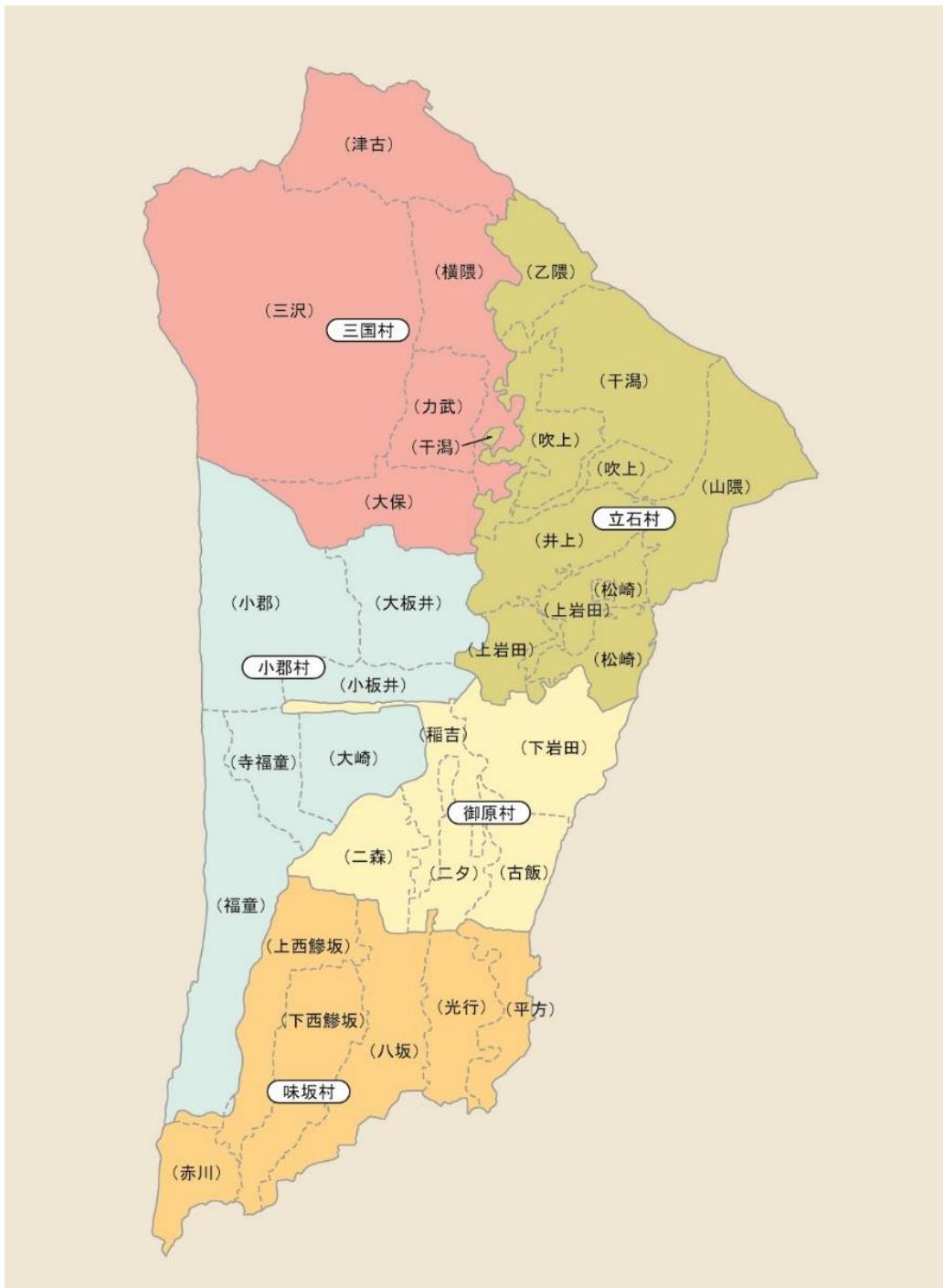
明治 9（1876）年に一部の村々が合併・改名され、明治 22（1889）年の町村制施行により御原郡小郡村・御原村・立石村・三国村、御井郡味坂村の 5 村となりました。この編成は、地形や地勢、水利、風俗の共通性を重視してなされました。また御原郡と御井郡は、明治 29（1896）年に山本郡とあわせて三井郡となりました。

現在使用されている大字名は、三国丘陵の新しい住宅地を除き、大半が明治 9 年時点の村名を踏襲しています。また、現在の市立中学校の校区は、明治 22 年に成立した 5 村に近い範囲です。立石村は立石中校区、御原村と味坂村は宝城中校区です。小郡村は北部の一部を除く大半が小郡中校区、



三国村は北半分が三国中校区です。三国村の南半分と小郡村の北部が大原中校区です。

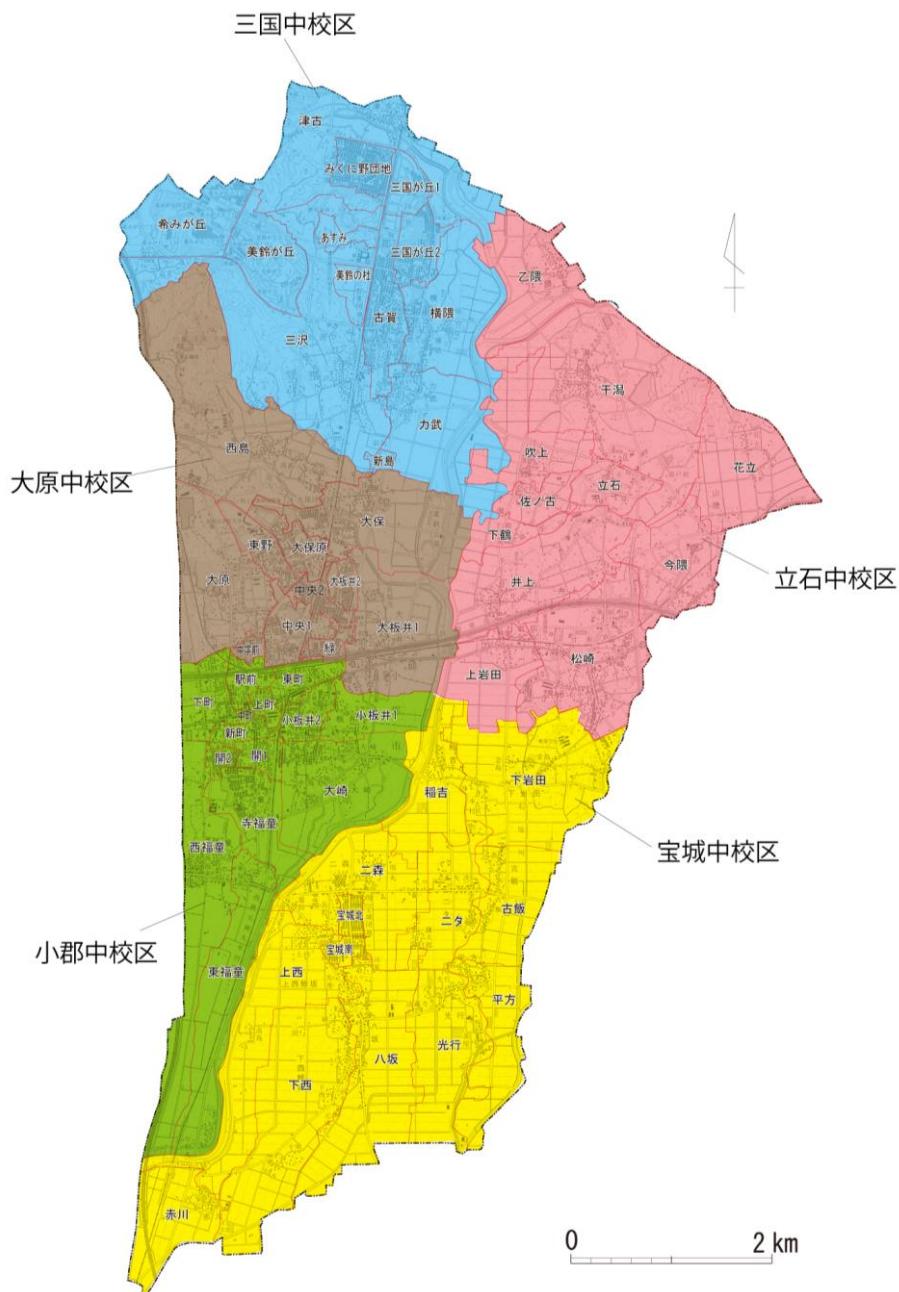
第二次世界大戦後、昭和 28（1953）年に小郡村は小郡町となり、昭和 30（1955）年に 1 町 4 村が合併して、現在の行政区域が新しい小郡町として誕生しました。そして昭和 47（1972）年、小郡町は市制を施行して小郡市となり、現在へつながっています。



明治 22（1889）年の町村制施行で置かれた 5 カ村  
(\* ( ) 付の地名は江戸時代の町村名を示す)

本計画では、原則として現在の地名（大字名）を使用します。ただし歴史的な事象を記す際は、当時の国名、郡名や村名を用いてその具体的な範囲を示すとともに、必要に応じて現在の地名を併記します。また指定等文化財は指定等名称、遺跡名は周知の埋蔵文化財包蔵地としての名称を使用します。

また、文化財の所在件数や類型別の分布は、市立中学校の校区単位で示します。明治 22（1889）年の行政区分に由来する、この区分に基づいて文化財の類型や分布を検討することで、近代以前の地域の特性がある程度把握できると考えます。またこの特性は、今後地域ごとの保存活用・管理計画の策定を行う際の基準にもなりえます。



現在の市立中学校の校区区分 (\*地名は行政区を示す)

### 3. 歴史環境

#### [旧石器・縄文時代]

市域で人びとが生活を営み始めたのは、およそ 25,000 年前の旧石器時代です。豊かな自然林を有する花立山<sup>さんろく</sup>山麓や、北西部の三国丘陵と呼ばれる丘陵地が狩猟・採集の場でした。しかしこの時期の石器は少量しか見つかっておらず、明確な生活痕跡もまだ確認されていません。

12,000 年ほど前、氷河期が終わって気候が温暖になると、海面が上昇して常緑樹林<sup>じょうりょくじゆりん</sup>が育まれ、それに伴って生息する動物も変化していきました。人びとは定住し、土器を作る新しい生活を始め、縄文時代へ移行しました。花立山や三国丘陵にはイノシシやシカなどの哺乳類<sup>ほにゅうるい</sup>が生息しており、集団で追い込み猟をしていました。千潟向畦ヶ浦遺跡<sup>ひかたむかいあぜがうら</sup>や一ノ口遺跡<sup>いちのくち</sup>、三沢北中尾遺跡<sup>みつさわきたなかお</sup>では、狩猟のための落とし穴が見つかっています。

#### [弥生時代]

弥生時代は、朝鮮半島から水稻栽培<sup>すいとう</sup>が伝えられ、食料確保の方法が大きく変化しました。当市にはかなり早い段階で米づくりの技術がもたらされました。まず、三国丘陵の小さな谷で湧水を利用した稻作が始まり、水利技術の進歩にしたがって中・南部の低地へ広がりました。三国丘陵の南端部にある力武内畠遺跡<sup>りきとううちはた</sup>では、木杭を打ち込んだ井堰で水流をコントロールし、小区画の水田へ流し込んでいた様子がわかります。三国丘陵では、その後も三沢遺跡をはじめ、次々と集落やそれに伴う墓地が営まれ、多くの人びとが生活していたことから「弥生時代のニュータウン」と呼ばれています。

このころ、北の玄界灘や南の有明海を入口として、海を越えた朝鮮半島の人びとと活発な交流がありました。三国丘陵には、朝鮮半島と共に通する形状の土器(朝鮮系無文土器)<sup>むもん</sup>を作り、使っていた集落が多数ありました。

稻作のための水田開発は、荒野を切りひらき、水路を掘削して河川の水を引き込む大掛かりな作業であり、稻作そのものにも多くの人手が必要でした。共同生活を営む集団の規模は徐々に大きくなり、また備蓄された食料や水田、水利をめぐる集団間の争いも起こりました。横隈狐塚遺跡<sup>よこぐまきつねづか</sup>の甕棺墓<sup>かめかんぼ</sup>で見つかった人骨は争乱の犠牲者で、石鎚<sup>せきざく</sup>や銅剣による負傷や頭部を切り取った痕<sup>あと</sup>がありました。集落同士の争いの結果、より強い集落が勢力を拡大し、これが『魏志倭人伝』に記されているようなクニヘと発展しました。

大きくなった集団の中には階級差が生まれ、リーダーはこれを統率するために貴重な青銅器や特



力武内畠遺跡



三沢遺跡

殊な土器を用いたマツリ(祭祀)を行うようになりました。

当市における弥生時代最大の集落は、大原中校区にある小郡・大板井遺跡群です。東西1,000m、南北700mの範囲に竪穴住居や甕棺墓、ごみ捨て穴などが造されました。また、朝鮮半島で作られた多鈕細文鏡という珍しい銅鏡2面を埋納した土坑や、マツリに使った武器形の青銅器が見つかっており、当時の権勢を示しています。

### [古墳時代]

複数の集落をまとめる有力者は、やがて地域を総括する首長へ成長していきました。この支配者層が近畿地方のヤマト王権の影響を受け、自らの権威の象徴として、土を盛り上げた墓である古墳を造るようになりました。当市の支配者層はヤマト王権と密接な関わりをもっており、早くから古墳の築造が始まりました。

最初に、三国丘陵に4基の前方後円墳が造されました。津古生掛古墳は、鶏形土製品やガラス玉、鉄鏃、鉄剣など、多彩な副葬品を持っています。周りに周溝墓や木棺墓をともなっており、生前の主従関係を反映した墓のあり方が見られます。地域の首長を埋葬する前方後円墳は、中期に横隈山古墳が、後期に石室内に線刻を持つ花立山穴観音古墳が、その後も続けて築造されました。

古墳時代後期に、特定の範囲に多数の古墳が密集する群集墳が営まれるようになりました。当市では、三国丘陵(三沢古墳群・苅又古墳群)と花立山山麓に円墳や横穴墓が造られました。三国丘陵では、死者を葬ったものだけでなく馬を葬った土壙墓も見つかりました。また花立山の円墳と横穴墓は総数300基を超える規模です。

弥生時代から活発であった対外交流は、古墳時代も続きました。三国丘陵の南部にある花聳2号墳は、朝鮮半島から持ち込まれた鉄鋌(鉄の原材料)を副葬品としており、これに近接する西島遺跡では、渡来人由来の技術で滑石製の玉を製造した工房跡が見つかっています。



小郡若山遺跡土坑出土品(多鈕細文鏡)



寺福童遺跡出土銅戈



津古生掛古墳



横隈山古墳

## [飛鳥・奈良・平安時代]

7世紀に入ると、中国大陸や朝鮮半島の政情不安を受け、防衛施設の整備が進められます。九州北部は大陸や半島に近いため、大野城や基肄城などの山城、水城や烽火が設置され、<sup>さきもり</sup>防人がおかされました。

一方都では、天皇を中心とする中央集権国家の建設が急速に進められました。律令が制定され、軍の移動や政策の伝達のため官道を整備し、各所に住まう人びとの把握と税の徵収を目的に戸籍が作られました。土地と人びとは全て国の所有で、税である米を栽培するため、戸籍をもとに1人ひとりに土地が貸与されました。また全国を60余りの国に分けて、直接的な支配体制を敷くために郡をおきました。

市域はその大半が筑後國御原郡、南部の一部が御井郡とされました。飛鳥時代の御原郡を治める行政機関は、付属する仏堂とともに上岩田に設置されました。この施設は『日本書紀』天武7(678)年条にある「筑紫國地震」で大きな被害を受け、その後、役所の機能は小郡官衙遺跡、仏堂は井上廃寺へ移転し、再建されます。行政機関は8世紀に三井郡大刀洗町の下高橋官衙遺跡へ再度移転しました。これらの遺跡の近くには、幅約6mの官道(筑後平野東西官道)が造られ、上部組織である筑後國府や九州を統括する大宰府と行き来しました。この時期、地方の行政機関における最重要の業務は、<sup>そ</sup>租(稻)・<sup>よ</sup>庸(布)・<sup>ち</sup>調(各地方の特産物)・<sup>ぞう</sup>雜徭(国司の命に応じた労働)という税を徵収することでした。小郡官衙遺跡では、このうちの租の収蔵場所と考えられる倉庫群が見つかっています。

税は当時の人びとにとって大きな負担で、貸与された田圃を棄てて逃亡する者もいました。対して社寺や貴族階級は、<sup>い</sup>き遺棄された田圃を私的に開発して所有するようになります。

このような私有地は<sup>しょうえん</sup>莊園と呼ばれ、莊園の増加が税制の崩壊を招きました。

高良宮(現・高良大社、久留米市)の造営に関する鎌倉時代の文書に、筑後国内の郡別に莊園・公領の面積が記録されています。三原郡に「鰯坂莊」184町、「三原莊」500町、「板井莊」80町、御井郡のうち河北郷内に「鰯坂莊」216町と記されています。市域に莊園が多くなっていたことがわかります。



上岩田遺跡



上岩田遺跡出土品等



松崎六本松遺跡



小郡官衙遺跡群 小郡官衙遺跡



### [鎌倉・室町・安土桃山時代]

平安時代末、地方武士の台頭と源平の争乱を経て、初の武家政権である鎌倉幕府が成立しました。筑後国には平家方の大莊園がありましたが、草野氏や神代氏など在地の豪族は源氏方にくみした者も多く、幕府に所領とその統治権を保障されて勢力を伸ばしました。

この時期は、津古・乙隈・吹上などの村々が属する三原庄、大板井から古飯までの範囲と想定される板井庄、安楽寺領である岩田庄、京都の宝荘巖院を本所とする鰯坂庄などの荘園が、引き続き経営されていました。三原庄は筑後国を中心とした武士階級の所領が分布していました。岩田庄は領主である安楽寺・太宰府天満宮とつながりがあり、のちに氏神として菅原道真をまつる上岩田老松神社を建立しました。鰯坂庄は三瀬庄と荘園領主が同じだったため、三瀬の鎮守である大善寺玉垂宮と造役の負担や芸能の奉納などで深い関わりを持っていました。

南北朝時代は、南朝方（宮方）と北朝方（武家方）の紛争がこの地域にも及び、大宰府を拠点とする北朝方の少弐氏と、肥後の守護であった南朝方の菊池氏らが戦火をまじえました。中でも南朝正平14・北朝延文4（1359）年に起った大保原合戦では、当市と三井郡大刀洗町を舞台に、総勢10万人ともいわれる大軍が戦ったと伝えられています。この戦いと、その後の福童原合戦に関する史跡や伝承、地名などが、両市町や久留米市の各所に残されています。

戦国時代の市域は、九州北部を支配下においた大友氏や肥前の龍造寺氏、薩摩から北上した島津氏らの侵入を受け、混乱状態に陥りました。度重なる戦乱で集落や社寺が焼き払われ、大保の御勢大靈石神社では「宝物や文書が戦火で失われた」と伝えられています。天正15（1587）年、豊臣秀吉が小倉から九州入りし、筑後から肥後に南下して薩摩の島津氏を降伏させ、この地の戦乱の時代は終わりを迎えました。



大原古戦場碑



御勢大靈石神社

### [江戸時代]

秀吉の九州平定後、筑後国のうち市域を含む「小郡三郡（御原・御井・山本）」は小早川秀包の所領となりました。その後、田中吉政が関ヶ原の戦いの功績によって筑後一国を与えられましたが、2代忠政が嗣子不在のまま逝去したため改易されました。次いで元和7（1621）年、有馬豊氏が筑後8郡21万石の領主として久留米に入府し、幕末まで継続して領国を経営しました。

当市は久留米藩領の北端にあたり、街道沿いの限られた町を除くと、ほとんどが農村地帯でした。御原郡 28 町村と御井郡 7 村が置かれ、このときの町村名の多くが現在の大字名として継承されています。久留米藩は、年貢の徵収をはじめとする領地支配のため、郡代（のちに廃止）と郡奉行を置き、その下に、地元の豪農から選出された大庄屋を置きました。当市では、井上（のち岩田）組・用丸組・味坂（のち五郎丸）組の 3 人の大庄屋が、農村経営の実務にあたりました。

農業の生産性を上げるために行われた最大の事業が、宝満川での稻吉石堰の築造です。総監督は久留米藩の普請奉行である丹羽頼母重次で、正保 4（1647）年に花立山から石を運び、砂堰であった稻吉堰を川幅 38間（約 70m）の強固な石堰に造り替え、水路を整備しました。さらに貞享 4（1687）年に、宝満川に三国堰（現・津古堰）・夫婦橋堰（現・大板井堰）・端間堰が築かれました。その後、幾度かの改修を経て、稻吉堰の水は現在も市内の田園を潤しています。また堰の築造とともに新たな農地開発も行われました。宝満川沿岸に、荒牧・開畑道・草場造など開発に由来する小字が残っています。

市域の中・南部は、宝満川とその支流が形成した肥沃な土地である上、稻吉堰の恩恵も受けられたのに対し、北西部の台地は農業用水の確保が困難な地形であったため、長く開墾が進みませんでした。

宝満川西岸の小郡村は、肥前国の対馬藩田代領を流れる秋光川の水利権を求め、これを巡って幾度も紛争を繰り広げた結果、用水を得ることができました。また、庄屋であった池内孫右衛門は、北隣の西島村・大保村を流れる高原川の水の利用を願い、交渉の末、余り水を取水できるようになりました。

またこのころから、ダブリュウや川祭り（川まつり）といった、農業にかかせない水をつかさどる水神に対する行事が、さまざまな村で行われるようになりました。

稲作が困難であった小郡町では、商品作物である櫟の栽培を積極的に進めました。庄屋の池内孫左衛門が、肥前の島原から苗木を購入することで始まった櫟栽培は、屋敷の周りや耕作放棄地へ植えるだけでなく、やがて新たに荒れ地を開墾して栽培するようになりました。

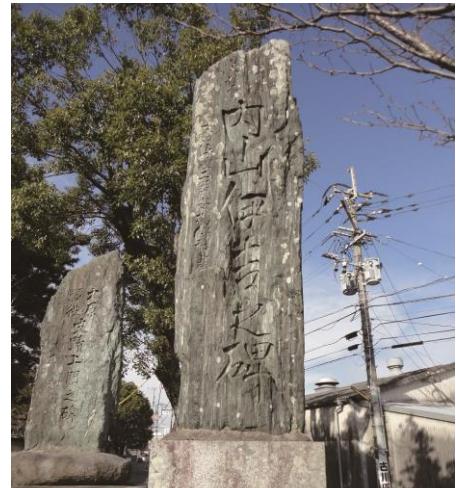
孫左衛門は、下町の内山伊吉と櫟の品種改良を進め、毎年収穫できて結実が多い優良種を生み出しました。この櫟は「伊吉櫟」と呼ばれ、久留米藩内に広がります。さらに肥前・肥後・



稻吉堰



池内孫右衛門翁之碑



内山伊吉之碑

薩摩など九州一円に苗木が出荷され、小郡町の主産業となりました。また櫨実を売買するのではなく、搾蠅を行った方がより収益が得られることから、蠅製造にたずさわる人びとも現れました。製造された木蠅は端間港を経由して大坂へ出荷され、莫大な富をもたらしました。

一方、北西部の三国丘陵は、農業に不向きな地形でしたが、冬になると鴨の群れが飛来する池沼や沢が各所にありました。江戸時代、領内の鶴・雁・鴨は藩主の占有であり、猟場で狩猟ができるのは、郡奉行を通じて鑑札を受けた一部の人びとに限られていました。久留米藩家老の執務日記である『古代日記書抜』に、鴨肉を幕府の御目付や長崎奉行、天草代官へ進物として贈ったとの記録があります。また、鴨肉を塩漬けにした「塩鴨」を幕府に献上するのが慣例であったとも記されており、藩の名産として重要な品でした。

このようにさまざまな産業の振興が図られましたが、久留米藩領では江戸時代を通じて水害や虫害が頻発し、領国經營は非常に厳しいものでした。



旧筑前街道及び旧横隈宿



彦山道及び旧小郡町

江戸時代の当市には、縦横に街道が走っていました。久留米から宝満川の西岸を通り、宿場町の横隈を経て筑前国へ至る旧筑前街道は、成立が中世にさかのぼります。寛文6(1668)年に松崎1万石を分知された有馬豊範は、これに代わって参勤交代道(天下道)を薩摩街道とし、松崎城や松崎宿を整備しました。北は筑前国の山家宿で長崎街道と合流し、南は久留米城下を経由して肥後から薩摩へ至ります。この街道は、松崎藩の廃藩後も基幹道として利用されました。

肥前から小郡町を経由して秋月方面へ至る彦山道は、物資の流通や英彦山神宮の参拝のための交通路として、多くの人びとが行き来しました。これを踏襲して整備されたのが、佐賀県鳥栖市から小郡市や朝倉市・朝倉郡を経由して大分県へ至る現在の国道500号です。

## [明治・大正・昭和時代]

明治4(1871)年の廃藩置県により、久留米藩は久留米県となり、その4カ月後に柳河・三池両県と合併して三潴県となりました。その後、明治9(1876)年に福岡県に吸収され、現在の範囲の福岡県が成立しました。市域は江戸時代の村々がほぼ存続していましたが、明治22(1889)年の町村制の施行で、御原郡小郡村、御原村、立石村、三国村、御井郡味坂村の5カ村に再編されました。

新時代においても、農業が基幹産業であることに変わりはありませんでした。明治政府は田畠勝手作許可令の発布や地租改正といった新制度を推し進め、同時に欧米の新しい農業技術と作物、肥料などの普及を図りました。また、これまで未開拓であった大原野や山隈原に、幕末から明治にかけ

て新たに開拓の手が入れられました。しかしその道のりは険しく、山隈原は郡農会の技師であった池松卯一郎の指導を得て畑作農地として開拓が進んだものの、大原野は耕地として維持することができませんでした。

また御井郡においては、筑後川の治水と水害対策が江戸時代からの最重要課題でしたが、これを実現するため、県会議員であった佐々木正蔵（のちに国會議員）と田中新吾の両名は政界から働きかけを進め、明治 30（1897）年によく水害防止に必要な改修工事が始まりました。田中新吾は政界を引退したのち、三井郡農会を設立し、稻の白葉枯病を研究し、耐病品種を育成して、これを広めることに成功しました。

新たな交通手段として鉄道の敷設も始まりました。佐賀県の田代から小郡・松崎を経由して甘木へ至る中央軌道は、大正 9（1920）年から昭和 2（1927）年まで工事が行われました。また大正 13（1924）年に、福岡一久留米を結ぶ九州鉄道（現・西鉄天神大牟田線）が開通し、当市に 6 駅が置かれました。

第一次世界大戦後、飛行機という新兵器を重視した陸軍が、現在の朝倉市・朝倉郡筑前町・三井郡大刀洗町にまたがる山隈原に大刀洗飛行場を建設しました。大正 8（1919）年に完成した飛行場は、昭和 12（1937）年の日中戦争勃発以後、陸軍飛行学校や航空教育隊、航空廠といった関連施設が次々と設置され、航空兵養成所の色合いを濃くしていました。干潟に射撃訓練場が置かれ、軍事施設を結ぶ軍用道路が敷かれました。また兵士や物資の輸送をより効率的に行うため、昭和 14（1939）年に国鉄甘木線（現・甘木鉄道）が敷設されました。東洋一の飛行場と謳われた大刀洗飛行場ですが、昭和 20（1945）年にアメリカ軍による 3 度の大規模空襲を受けて灰燼に帰しました。

### [第二次世界大戦後から現代]

終戦の翌年である昭和 21（1946）年 4 月、女性に参政権が認められた初めての国政選挙である衆議院議員選挙が行われました。当市を含む福岡県第 1 区（福岡・筑後地区）で、女性議員である森山ヨネが当選しました。昭和 22（1947）年 4 月に県知事、市町村長、衆参両議員、県議会議員や市町村議会議員の選挙が行われ、住民が直接選挙で首長や議員を選ぶ民主政治が本格的に始まりました。

また農地改革や旧軍用地の払い下げが行われ、食料増産が推進されました。当市では、大原の旧陸軍被服廠跡地への入植や、大保・千鶴・下岩田の開拓、立石の灌漑事業などが進められました。現在、市南部の平野部は日本有数の麦作地帯として知られ、野菜や花卉は、九州外の大消費地へも出荷されています。

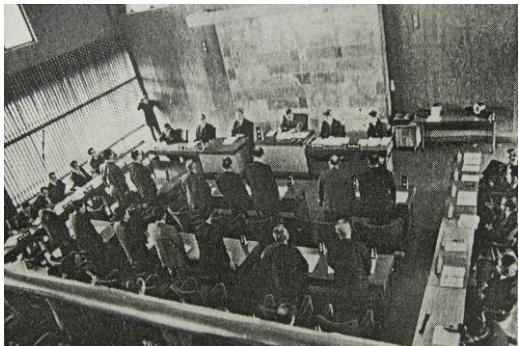
戦後の復興と発展が進む中、未曾有の大災害が市域を襲いました。昭和 28（1953）年 6 月末、九州北部は梅雨の豪雨に見まわれました。25 日の朝から降り出した雨は、翌日に豪雨となり、25 日か



田中新吾像

ら 29 日までに合計 688.4 mm の雨量を観測しました。これによって筑後川の水位が急激に上昇し、いくつも堤防が決壊して大洪水を起こしました。宝満川とその支流、溜池も氾濫し、御原村や味坂村はほぼ全域が浸水する甚大な被害を受けました。

昭和 38 (1963) 年 6 月に、28 年の水害時を超える量の短時間降雨があり、高原川をはじめとして多数の河川の堤防が決壊しました。押し寄せた濁流は端間の集落を襲い、8 人の尊い命を奪いました。西鉄天神大牟田線は寸断され、国鉄甘木線の道床<sup>どうじょう</sup>は流失し、県道も損壊しました。



小郡町議会の市制施行決議



市制施行の記念パレード



市制 50 周年記念行事の開幕式

昭和 30 年代の高度経済成長期に、道路整備や鉄道輸送の強化が進み、当市は再び交通の要衝として重視されるようになりました。国会に全国的な高速道路網の建設計画が出され、九州には北九州から福岡・熊本を経由して鹿児島・宮崎を結ぶルート（現在の九州自動車道）と、長崎一大分間を結ぶルート（現在の長崎自動車道・大分自動車道）が計画されました。市域に、昭和 48 (1973) 年に九州自動車道が、昭和 62 (1987) 年に大分自動車道が開通し、令和 6 (2024) 年には九州自動車道に新たに小郡鳥栖南スマートインターチェンジが設置されました。

昭和 47 (1972) 年に福岡・久留米両都市圏の人口増加に対応するため、県の「中九州ニュータウン構想」が発表されました。筑紫野市南部から小郡市北西部にいたる丘陵地で、大規模な宅地開発を行う計画です。これによって小郡市の人口は大幅に増加し、新たな市街地が生まれました。また開発に先立つ遺跡の発掘調査によって、弥生時代の集落が再び姿をあらわし「歴史の宝庫・小郡」として知られるようになりました。

行政区分は、昭和 30 (1955) 年に 5 つの町村が合併して現在の小郡市の範囲が小郡町となり、昭和 47 (1972) 年に市制を施行して小郡市が誕生しました。令和 4 (2022) 年に市制施行 50 年を迎えました。